

中国簡牘学国際学術研討会参加記

佐藤信

七月三〇日 開幕式・全体会(1)

七月三一日～八月一日 分科会(第一組～第四組)

八月二日 全体会(2)・閉幕式

であり、全体会と二日間・四組にわたる分科会での報告を合わせ、八〇本に及ぶ報告が用意されるという大規模な学会であった。各報告には必ず日本語通訳が入った。全体会の報告は次の如くである。

岳邦湖(中国・甘肃省文物考古研究所)

「居延・敦煌漢代烽隧遺址の考古発掘」

謝桂華(中国・中国社会科学院歴史研究所)

「新旧居延簡冊書復原研究」

何双全(中国・甘肃省文物考古研究所)

「居延甲渠候官漢簡の整理と研究」

李均明(中国・中国文物研究所)「居延漢簡の史料価値」

何茲全(中国・北京師範大学)「簡牘と中国史研究」(以上1)

馬先醒(台湾・中興大学)「居延新簡」商榷

大庭脩(日本・関西大学)「『檢』再考」

今夏一九九一年七月二九日から八月二日にかけて、中国甘肃省蘭州市において、世界で初めての中国簡牘学国際学術研討会が開かれた。甘肃省府・甘肃省文化庁とともに甘肃省文物考古研究所・甘肃省博物館・中国文物研究所・中国社会科学院歴史研究所の四者が事務局となつて主催したもので、中国各地の簡牘研究者をはじめ台湾・香港・日本からの参加者が相集い、総勢一三〇名を越える盛会であつた。日本からは大庭脩氏(関西大学)を团长に、永田英正氏(京都大学)ほか中国簡牘学・中国古代史・書道史・東洋美術史・日本古代史の研究者や書家ほか計三〇名が参加した。筆者は日本の木簡研究の立場から、中国簡牘を実見できる機会に期待して一行に加えていただき、多くの知見を得ることができたので、ここに簡単な紹介を行ないたい。

日本からの一行は七月二七日大阪空港にて結団し、空路北京へ向かつた。北京で故宮博物院或いは中国歴史博物館などを見学の後、西安へ向かう。西安では新しくなった陝西歴史博物館などを見学、その後二九日に甘肃省の省都蘭州に入った。蘭州では宿舎の蘭州飯店がそのまま国際学術研討会の会場となつた。研討会の日程は

永田英正（日本・京都大学）「候史広徳坐罪行罰檄について」

裘錫圭（中国・北京大学）「漢簡文字釈読上の注意」

初世賓（中国・甘肅省博物館）「甲渠塞部建置考略」（以上2）

何茲全氏の、歴史学即史料学ではない、文物出土地の保護を、簡牘の整理・発表を早く、簡牘の整理・研究者と歴史史料の研究者の共同研究を、という論旨には重みがあった。全体会の討議では、李・

永田報告に関して候官・部・隣の規模についての諸氏の見解の相違や、大庭報告の検の移動と機能についての話が興味深かった。

簡牘を利用した研究ばかりではなく簡牘そのものについての研究の報告もみられ、筆者にとっては、『居延新簡』（文物出版社、一九九〇年）の釈文作業グループでもある初世賓・李均明・何双全・謝桂華諸氏などの、簡牘の機能や整理についての報告・発言が印象に残った。この面での中国の研究レベルはかなり高いものであり、情報公開や保存などの課題とあわせて、今後日本の木簡研究との相互交流の必要性を痛感した。閉幕式においては、何茲全氏が参加者を代表して簡牘学会設立の提唱を行ない、拍手で迎えられた。

宿舎のホテルが学会会場でもあり、客室で中国の研究者と意見交換ができたことは有難かった。また、会期に合わせて甘肅省博物館で開催された甘肅出土簡牘文物展で簡牘を間近に実見し、また担当者に質問できたことも、収穫であった。簡牘の冊書の検討・復原には日本木簡にない努力と時間が必要であることがよく了解できた。

研討会に引き続いだエクスカーションとして河西見学会が行われ、

八月三日 蘭州～武威（武威市博物館・文廟文学）～張掖（泊）

四日 張掖（張掖市博物館・大仏寺見学）～酒泉～嘉峪関

（長城博物館・嘉峪関閻城見学）（泊）

五日 嘉峪關～玉門鎮～懸泉（漢代・懸泉置遺跡発掘現場見

学）～敦煌（月牙泉見学）（泊）

六日 敦煌（莫高窟或いは漢代陽關遺跡・敦煌市博物館見学）というコースで、中国・台湾・日本の総勢一三〇名がバスなどの車両七台を連ねて砂漠の中千キロメートル以上をひた走った。延々と続く砂漠と長城・烽燧、懸泉置遺跡での乾燥した簡牘の出土状況は、嘉峪関閻城の史跡整備状況・莫高窟などとともに特に感銘深いものであった。研討会・エクスカーションを通して、時に不慣れな点も見られたが、中国主催者側の示された国際学会に対する熱意と厚意に深く感謝したい。

日本の参加者は、帰路は空路蘭州に戻り、翌日再び甘肅省博物館を見学、翌八日蘭州から上海へ飛び、反省会を開いた。そして八月九日、上海市内見学の後大阪空港に帰着、解散した。筆者にとっては、初めての訪中でもあり、中国の土地や遺跡の雄大さを実感できただほか、簡牘そのものについての研究状況に触れ得たこと、中国そして日本から参加の人々と情報交換できたことなど、多くの収穫を得ることができた有意義な学会参加であった。